

成年に因んで犬の童謡を語る

葛原しげる

昭和九年は成年です。犬は、まことに可愛くて、元氣です。時に、いたづらで、又勇猛です。多くの家畜の中で、何よりも、ニコ／＼ピン／＼の氣分が豊かです。それに、偶然にして、私も、實は成年ですから犬の玩具が、次々に集まりました。コドモの様に悦んでゐます。今年は私の年として何さなく嬉しい氣持がします。それで、今までの拙作の中から、犬の童謡を集めて反誦してみる事にしました。今、幼稚園や、小學低學年のお子さんの中には、生憎、成年の方は無いのが、つまらなく感ぜられますけれど、しかし、何のお子さんも、犬は、ちんころは、ボチは、お好きなんですから、御利用下さい。二十數年前、コドモ雜誌の表紙や口繪にコドモをかいて貰ふ時、畫家によく犬を配する事を求めましたが、それは、参考に集めておいた我國の

童畫に、非常に多く犬が配せられてをり、その必要である事を感じたからです。私が、もし、幼稚園長さんだつたら、兎と共に、鳩と共に、犬を飼ひたいと思ひます。

ところで、犬も、一番可愛いののは、小さい犬です。「ちんころ」です。すべて小さいものゝ可愛さは、また其の美しさは、望遠鏡で擴大して近く見るよりは、望遠鏡を逆にして、縮小して遠く見る時の方が、すつかり美しく見えるのと同じく、誰にもある感じですから、小さい形の玩具が、大きな坊ちゃんたち——犬、もの間にも、非常に歡迎せられる所以でもありませんが、私は、十數年前、此の意味で、擬聲も擬態もつかぬ「ちんころちん」の類を多くしたのを、ものしました。

小犬

弘田龍太郎氏曲

一、ちんく、ころく、ちんころちん

お鈴が ちんく、ちんころちん

首輪の小鈴も、をぶつてる

可愛い、小犬 ちんころちん

ちんく、ころく、ちんころちん

二、ちんく、ころく、ちんころちん

小犬 ちんく、ちんころちん

ころける様に、みんできて

ぢやれつく、吠えつく、ちんころちん

ちんく、ころく、ちんころちん

三、ちんく、ころく、ちんころちん

小鈴は ちんく、ちんころちん

切れて、ミびそに、ふるしつぽ

しつぽに、鈴つけよ、ちんころちん

ちんく、ころく、ちんころちん

(童謡唱歌名曲全集—2)

小犬ミはいへ、犬の首に鈴をつけるなんて、憤慨する坊ちやんも有りさうですが、かの小形の犬の「ちん」には、よく鈴をつけて飼つてゐる婦人さへあります。「ちん」でなくとも、小犬には、鈴をつけたいものです。小さい時には、人間にミつては、犬であつても、猫であつても、小さくさへあれば、可愛がる対象物ミして、苦状はないのです。稍々大きくなるにつれて、犬は犬、猫は猫ミ、區別されるこミ、幼児期には、男女の生別が、判然しないのに似てゐませんか。

そして、あんまり善く振られる尾に、鈴をつけよ、ミは、物好きですが、全く以て、さうしたら、よく鈴が、鳴る事せう。ちろろく、ちんちろろミ、ひつきりなしに。

次のは、幼児ミ犬ミの交渉に、意外な不調和のある残念さです。可愛がられるミ、つけ上るのは、猫ばかりではありません。物はほぎく、にしないミ、なきミ、修身めきますが、これは事實を描寫したに過ぎません。

ピスケット

ワン ワン ワン

それ一つ ビスケット

尾を振り尾を振り たべました

ワン ワン ワン

それ そーれ ビスケット

いくつでもく たべました

ワン ワン ワン

もうないよ ビスケット

いつまでもく ほえました

ワン ワン ワン

まだ ほしい ビスケット

叩くまねして 追ひました

ワン ワン ワン

しつ しつ しつ もつ

けるまねしたつてにけませぬ

ワン ワン ワン

やだ いやだ いやだよ

弟は にけて ゆきました

『桂花集』ミいふのは、戸澤子爵夫人の和歌集ですが、この中には、犬の歌が幾首かあります。そして、この歌集中の歌には、童心豊かなものが多いので、この全評の時、私は、この事に中心をおいて「心の花」に感想を寄せておきました。

子を生みて心やすげに尾をふりつゝ芝生

ゆく犬にふみ涙おつ

父無き子五つかゝへて大いなる責をぞお

へるあはれ母犬

寂しやこ悲しき聲になきたてゝ母よぶら
しも何處にか行きし

これは三首とも嚴肅であります。

あわたしうあられ降りくれば幼な兒は

小犬かゝへて庭より歸りく

犬も猿もあうむも子らに引きそひてこの

新家に住まひそめたり

犬の飯拾ひに出でし子鼠のさぞや明日よ

り噪ぐなるべし

この最後のは「子鼠左様なら引越すよ」といふ童謡にして

みましたが、最も、子犬らしいのは

誰が犬ぞ人ちがへしてつき来るよ夏まだ

あさき若楓道

の一首です。全く、迷ひ子の犬も小さいのほご、人さへ見れば、自分に好意を有つてゐてくれる事を知つてゐるか

の様に、なつかしげに寄つて来るのです。この信じ切つてゐる態度は、まごに、人間世界にも、幼児にのみある事で、よく似たものではありませんか。

ついて来る小犬

僕を 誰か

まちがへて

小さな犬が ついて来る

朝霧ふかい垣根みち

僕が こまれば

すぐ こまり

歩き出したら ついて来る

可愛いゝ犬はきこの犬

若楓であらうと、燃える様に紅葉した楓であらうと、時季には無關係に、小犬は、ついて来るのです。大きい親犬なきに後をつけられるのは無氣味で困りますが、小犬で

さへあれば、無氣味どころか、私共は悦んでしまふのでした。次の一篇も、佛蘭西の童謡の意譯です。

よその小犬

フランスの曲

お家の御門で　ごこのかの犬が

かはいゝこゑで

ワン　ワン　ほえる

かけ出て　みるこ　小さな犬が

頭や　尻尾を　ふりながら

ぢやれ　つき　まはる（大正幼年唱歌第十一集）

犬の習性が何うかは知りませんが、小犬の癖に、一人前の心持をして、怪しの物を見れば、威厳を示して吠える小犬の、生意氣さ、今までの「クキーン、クキーン」も聞えて、いゝ優しいボチの聲ミは事かはり、「ワン」よりもは「ウオッ」も聞えて、おぎす様な底力をこめた吠え方をするのです。そして、けしからぬ事には、門前を走つた自轉車に

吠えて、飛び出たボチが、我が家の方を見て、吠えるのです。

ボチが吠えたよ

宮城道雄氏曲

もらつたばかりの

ボチが　ほえたよ

かはいゝ　こゑして

ボチがほえたよ

犬の　こゑして

ボチがほえたよ

自轉車　みては

ボチが　ほえたよ

門から　外見て

ボチ　がほえたよ

門から　内見て

ボチ　がほえたよ

（箏曲童謡第一集）

宅にも犬がゐりました。長男が、お友達の家から貰つて來たのですが、生れて間のない時に、抱いて歸つて、あんまり可愛いので姉妹たちも疊の上で遊ばせてやり、殊に、その時尋常二年であつた次男は、夏、房州へも連れてゆくさいふので、兩國驛から、箱に入れられて運ばれるのを見て、汽車が、まだ兩國驛を出発しない間にも

「ボチはどうしてる？」

ミ案じつづけられてゐましたが、やがて、發車するや、

「ボチも乗つて來てゐる？」

ミ案じるのでした。大丈夫！ミ何度も謂つては、安心させてゐる中に、さこかの驛に一度止まつた汽車が、又、急に、ガタン！ミ踊る様に揺れて、列車内の幾人かは、窓なきで、こつっんこみ鉢合せをしたりしましたので、

「ボチも、こつっんこをしたでせう」

ミ心配しましたので、

ボチの初旅

一、初めて 汽車に のせられて

ボチも お伴で ございます

それでも ボチだけ ひきりだけ

箱に おしこめられました

箱ごみ 後の貨車の中

荷物ミ一しよに行くのです

二、ビリ／＼ボーで 動く汽車

ボチは びつくりしたでせう

それでも 行李や トランクの

中でだまつて ゐるのでせう

ガタン ミ 汽車のゆれる度

頭を コツン ミ 打つてしよか

このボチは、初めて異境に迎へる第一夜第二夜を寢ませんでしたが殊に、その第一夜は、空瓶の底で啼く蟬の聲が、妙にこもつて、うなつて、ボチを、驚かせた様でした。

夜中のボチ

夜中に ボチが なき出した

泥棒が來たんぢやないんだよ

別荘の夜の二日目で

ねられないから なくんだよ

ゆふべは、電燈へ こんできて

サイダの空瓶へ 入れられた

小蟬こせみの 夜中に なくころゑが

變へんにきこえて 吠えてゐた

小犬の仕方のなさは、人間の言葉を解してくれないで、

時ならぬ時に、聲を立てる事でした。猿芝居と同じく、犬

芝居の面白味は、このぢれつたさにもあるのです。子供

に、仲間入りして、一しよに、かくれん坊をさせて貰つて

ゐる小犬が、小犬だからワンミ吠えて、

「仕方のないボチねえ」

ミ、小さい手で、たゞかれたでせう、次の一場面。

小犬をつれて かくれん坊

中山晋平氏曲

一、太郎は かくれて 木戸の内

みよ子は立つてる 倉の壁

太郎は しゃがんだ ちどかんだ

みよ子は 目かくし 白エブロン

「もういゝかい」

「まーだよ」

二、太郎は じやれつく犬ころの

頭を なでなで しづめてる

みよ子は バタ／＼かけ出して

キヨロ／＼立つてる 倉のかぎ

「もういゝかい」

「まーだよ」

三、さうしてもしやがまぬ犬ころを

むりやり おさへて なかしたら

みよ子は きいたか きこえたか

木戸の前まで いそぎ足

「もう いゝかい」

「ワン ワン ワン」 (ビクターレコード)

畜生であるゆゑに、似た失敗は、昔から、いろいろの犬がしてゐます。中でも、イソップの話は、あまりに有名です。

よくばり犬

梁田貞氏曲

一、肉をぬすんで よろこんで

橋を わたつて かへるまき

よくばり犬はおそろいた

橋の下にも 大きな犬が

肉を くはへて にらんでゐるよ

二、あれも ぬすんだ肉だらう

うばひ取らうまき 大ごゑで

一こゑ ワン ミ 吠えてみた

するまき 自分の くはへた肉が

水にながれて しづんで行くよ

(大正少年唱歌第二集)

犬まき猫まきは、犬まき猫まきより、もつまきよき對照であり、よ

き家畜であります。そこで、男兒向には犬、女兒向には猫、

二つを組合せて幾つもあります中に、

犬まき猫

小松耕輔氏曲

一、私は お家の犬ですよ

私が るないまき 悪ものが

お家へ はいつてまゐります

私は お家の 忠義もの

ワン ワン 私を いつまでも

可愛がつて 下さいな

二、私は お家の猫ですよ

私がるないまき、夜の間に

ねずみが出ます さわぎます

私は お家の忠義もの

ニャア ニャア 私をいつまでも

可愛がつて 下さいな

(大正幼年唱歌第四集)

ワンく ニャオく

宮城道雄氏曲

一、ましらい小犬がワン ワン

黒い小犬も ワン ワン

白くても

黒くても

ワン ワン

ワン ワン

一、親猫一ぴき ニヤオ ニヤオ

小猫二ひきで ニヤオ ニヤオ

おはなしを

してるのも

ニヤオ ニヤオ

ニヤオ ニヤオ

(箏曲童謡第五集)

此の後ののは、ビクターレコードに吹込まれて發賣された時も、この伴奏の卓越したる擬聲をほめて、效果的に胡弓を使驅してあるのを悦び、幾十回さもなく、演奏會では、

アンコールされた曲ですが、もし、これは、先の國定教科書國語讀本卷一の挿畫からのヒントで作つたものです、白い犬と黒い犬が、何の背景もなく、かいてあります。そして、白い犬でも、黒い犬でも、さちらも、ワンワンとなく

のです。おもへば不思議です。それと同時に、猫も、親猫も子猫も何方も、ニヤア／＼となくのですが、猫の言葉は、我々人間には分らないのに、猫の親子は、なきつゞけます。話しつゞけるやうに。

此うした動物のなき方の不思議は、何も、犬と猫とに限つた事ではないのですが、人間に一番親しまれ、殊に、幼児に最も仲善しであるのが犬ですから！。

従つて、幼童と共にある家畜としての第一位なる犬を配して、「光」の不思議を童謡にしたものに次のがあります。

かけこかけ

一、お日様 出たよ

雲から 出たよ

皆も 出て来て ならんだよ

ボチも 上手にならんだよ

姉さんミ妹ミ

兄さんミ弟ミ

皆出て ならんだよ

お日様 ニーコニコ

二、かけ かけ 来たか

どこから来たか

姉さんの長いかけこ

妹の可愛い かけこ

兄さんの大きいかけこ

弟の小さい かけこ

ボチの短いかけこ

かけこ かけこ ならんだ

裏の木戸

お乳屋さんの後から

お米屋さん

お米屋さんの後から

お豆腐屋さん

お豆腐屋さんの後から

洗濯屋さん

口笛ふきふき八百屋さん

開けつばなしの裏の木戸

(幼年の科擧)

宮城道雄氏曲

八百屋さんの後から

少しして

大きな おこゑの お魚屋さん

そのまた後から ぎこの犬

はいつてみたり出てみたり

開けつばなしの裏の木戸

昭和八年十一月二十五日、東京の神宮外苑にある日本青年館で初演奏された童謡の一つに次のがあります。この歌詞の内容の面白味は、犬にある事が、幼童には分りにくいと思案じます。却つて、いろ／＼の御用聞が出たり入つたりする事の方が、幼童には、面白がられませう。しかし、この犬が登場する爲に、全體の印象が更に活々して来る事は申すまでもありません。

こまれ、犬は、幼童こいはず、コドモの世界を、明るくも、嬉しくするものでした。戊年の今年です、さうぞ、犬こいふ犬がどこでも、幸でありますやうに、そして私にも、もつと善い「犬」の童謡が生れますやうに。(八、一一、三)